

僕のこだわり

職場体験学習と関連させた道德の時間

- (1) 主題名 理想の実現 [1 - (4)]
 (2) ねらい 自分自身の理想を見だし、実現に向けて積極的に生きようとする態度を養う。
 (3) 資料名 「僕のこだわり」
 (4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点
導入	1 主題に対する関心を高める。	このクラスで将来、就いてみたい職業人気ナンバー 1 は、何だと思えますか。 ・医者じゃないかな ・パイロットかな ・学校の先生かも	事前にアンケート調査を行い生徒の興味・関心を把握しておく。 職場体験学習の事前学習での調査結果を活用するとよい。
展開	2 資料前半を読んで、弘志の心情を共感的にとらえる。	みんなは、弘志の友だちのように自分の夢をはっきり言えるかな。それとも弘志のように悩んでしまうかな。 ・私は、小さいときからの夢がある ・弘志の気持ち分かるよ お父さんは、なぜ、弘志のは夢ではない、ダメだなんて言ったんだろう。 ・子どもの頃から弘志を見ていたから ・本気でないのが分かるんじゃない	多くの生徒が、弘志に共感すると思われる。生徒指導の観点からも個々の生徒の心情を把握するよう努める。
	3 資料後半を読んで弘志の変化の原因に気付く。	弘志は職場体験学習で何を学んだんだろう。 ・礼儀とかあいさつとか ・生き生きと働くことのすばらしさ ・自分なりにこだわった生き方があるってことかな	資料後半で明らかになるので、解決する必要はなく、課題を提起した形で後半に進む。 職場体験学習の事前指導でなされた目的部分が発表されると思われるが、型どおりにならないようしっかりと考えさせる。
	4 資料から離れて主題に迫る。	誰もが理想の職業に就いて、理想的な生き方ができると思えますか。そうでなければ不幸と言えますか。 ・夢が叶うのは一部の人かな ・理想の職業に就いても、やる気や適性がなければ苦しいだけ ・どんな仕事についても、その中で夢をもてる人は幸せだと思う	どんな仕事に就いても、自分なりのこだわりをもち、その仕事の中で理想を実現しようという態度が大切であることを押さえる。
終末	5 理想的な職業生活についての展望をもつ。	これから皆さんがお世話になる職場の方々のごこだわりについて話してもらいました。	「子どもの時からこの仕事に就こうと思っていましたか」 「仕事でのこだわりはなんですか？」 「今、幸せですか？」 の 3 つの質問でインタビューし、編集しておく。

「僕のこだわり」

【前半】

先日の学級活動の時間、僕にとつてはちよつと落ち込む出来事があった。その日、先生は、来月の職場体験学習にかかわってクラスみんなに将来の職業について尋ねた。正直、何も考えていないわけではなかったが、これといつてなりたいたいものがあるわけでもなかった。意外だったのは、クラスの親しい仲間がなるほどと思わせるような職業を発表したことだった。運動神経抜群の伸二の夢はサッカー選手。毎日、朝早くから夕方暗くなるまでサッカーの練習に明け暮れている伸二。サッカーにかける情熱は誰にも負けない。綾子は、小説家ときた。確かに、いつも本を持ち歩いているし、朝読の時間に読んでたのは太宰治だった。明は映画監督だと。いつも映画の話ばかりだし、スピルバーグを尊敬していると言ってた。文化祭の劇の演出を買って出て、えらい熱の入れようだった。悦子は、アナウンサーだそう。放送部で活躍しているし、お昼の校内放送の声は確かにひきつけるものがある。圭介のやつだつて胸を張って堂々と応えやがった。親父の跡をついですし職人になるんだと。あいつも毎日、きまつて店の手伝いをしている。僕の順番がやってきたとき、本当に困ってしまった。まだ、決めていませんとでも言っておけばよかったのに、つい「サラリーマンです。」と答えてしまった。教室に笑いが起こったが、先生は、それを制して、

「先生だつてサラリーマンだぞ。サラリーマンにもいろいろあるけど、どんなことがしたいんだ。」

と聞いてきた。ぼくは、それに答えることができなかったんだ。結局、職場体験学習の希望職種の欄は「特になし」に をすることになった。

授業の後で、みんなが僕をからかいにきた。

「弘志。なんだよ、サラリーマンで。」

残念ながら、そのときの僕は、みんなに冗談ばく返事を返せる状態ではなかった。それを察したのか、伸二が言った。

「弘志、おまえ昔、スポーツカーみたいな作りたいつて言ってた。自動車の会社に入つてサラリーマンのエンジニアなんてのはどうだ。」

正直言つて伸二の言葉は救いだつた。なんだか、僕にも夢のようなものがわいてきた感じがした。

その夜、夕飯の席でめつたに口をきかない親父が急に切り出した。

「弘志。おまえ将来何になりたいんだ。」

親父は、ガソリンスタンドを経営している。今日、学校の先生が職場体験学習の受け入れを依頼に来たそう。それでそんなことを聞いたらしい。僕は、今日、学校であつたことを全部話した。親しい友だちがどんな夢をもっているかということも。それで、僕はスポーツカーを作りたいと話したんだ。親父は、「ふん。」と言つた。黙つて食べていたが、少しして、

「弘志。おまえのは夢じゃない。たぶんダメだね。」

と言つた。何でだよと食い下がりたいところだったが、なぜか、いつものように親父に向かつていけなかった。

「まあ、責任の一端は俺にもあるな。ちよつと待ってろ。」

親父はそういつて席を立つた。親父は自分の部屋から何やら大事そうに数冊の本を抱えてきた。それはスポーツカーの写真集とその性能を紹介したものだった。表紙もきれいなことから親父が大切にしているものだということはよく分かつた。

「これでも読んでみる。」

それだけ言つて、親父は風呂場に向かつた。

その夜、僕は布団の中で親父の貸してくれた本を開いた。昔のスポーツカーから現代のスポーツカーまで美しいカラー写真で紹介してあつた。ただ、はじめは興味深くページをめくっていたが、いつ

のまにか眠ってしまった。それきりその本を開くことはなかった。

何日かたったある日、三週間後に迫った職場体験学習の職場希望調査が行われた。みんなワイワイガヤガヤとはしゃいでいたが、僕は別にどうでもよかった。職場紹介欄には、親父のガソリンスタンドも入っていた。それでも面白そうな職場はないかと、とりあえず隅から隅まで目を通した。特に興味をひくものもなかったが、「特になし」という欄もなかった。それで結局、仲のいい伸二や明たちと同じ職場を希望することにした。

【後半】

数日後、自分の配属先が発表された。なんと第三希望の製材所だった。サービス業よりも製造業の方が「いらつしやいませ」を言わなくていいと思っただけ希望したのだ。そして、その日はすぐにやってきた。三日間の体験学習だった。そして、あつという間の三日間だった。製材所といっても材木の切断を手伝うようなことはしない。あんな大きな音のする機械のそばにただで怖かったし、おじさんたちも近づけてはくれなかった。仕事はもっぱら工場の片づけや掃除、材木の運搬の手伝いだった。フォークリフトにも乗せてもらったし、建築現場への配達にも同行した。その場その場で、大工さんや設計士さん等いろんな人から声をかけられた。中学生が職場にやってきたのを冷やかす半分で声をかけてくれるのだろが、いいかげんな返事をしていると「元気がない」とか「しつかりしろ」ととがめられた。それにしても働いている人たちはみんな生き生きしていて、何かにつけてこだわっていた。僕に教えてくれることは、正直どうでもいいことのように思えたが、一つ一つにそうする理由があつて、なるほどと思わされることばかりだった。

職場体験学習が終わった日の夕食の時、親父がまた切り出した。

「それで製材所はどうだった。」

ぼくは、この三日間のことをありのままに話した。珍しく親父はご機嫌にその話を聞いていた。自分のガソリンスタンドにきた中学生のこと話してくれた。

「ところで弘志、この間のスポーツカーの本読んだのか。」

「まあね。」

「何だそれだけか。」

「よかったよ。」

「たぶんそんなところだろうと思ったよ。本気だったらもつと本を貸してくれと俺にせがんださ。でも、おまえはそこまで夢中にはなれなかった。そういうことだ。」

親父は続けた。

「おまえの友だちは、みんな夢に向かって一生懸命何かやってるだろう。だけど、おまえは何もしちゃあいない。本当にやりたいものってのは、うずうずしてじつとしてられないもんだ。」

僕には、親父の言いたいことがよく分かった。要するに僕には、こだわりがなかった。何に対してもこだわろうという気持ちをもてないできたのだ。

「親父。今度、建築家のこと調べてみようと思っんだ。ちょっとひっかかるんだ。」

「ほう。面白そうじゃないか。いろいろ試してみるといい。」

その日は、遅くまで親父の昔話に付き合った。そして、ガソリンスタンドの店長のこだわりもたっぷりと聞かされた。

今度の職場体験学習は、僕にとってのいい転機になった。建築現場での大工の棟梁の言葉が心に残っている。

「こだわりのないやつは一流にはなれん。」

僕にとっての本当の夢が、もつすぐ見つかりそうな予感がしていた。

活用に生かすための実践報告

「僕のこだわり」

1 主題の設定

中学生の時期は、人間としての生き方や社会の仕組みなどについての関心が高まり、自分の将来に向かっての理想を求める時期だと言われる。しかし、現実には、将来に対しての展望がもてなかったり、無関心であったりして必ずしも生徒が理想に胸を高鳴らせているとは言えない。モラトリウムという言葉に示されるように、自分が何をしたいのかを明確につかみにくい状況がある。こうした中で、自分自身が人生をかけて実現すべき価値を見だし、積極的によりよい生き方を追い求める態度を養うことが必要である。ここでは、将来について考えるきっかけとなる職場体験学習との関連を意識した実践を試みた。

2 指導過程の工夫

職場体験学習の事前学習で取り組んでいることを道德の時間に生かし、この授業で得たものを職場体験学習の中に生かせるよう資料を作成した。この資料を生かすために、導入部では、事前学習で活用した調査結果を利用した。展開部では資料に寄り添った発問を心掛けても、職場体験学習そのものの留意事項など事前指導で培われた体験活動のための知識が思考の深まりを妨げる可能性があるため、資料から離れた発問を行った。終末では、職場体験学習の受け入れ依頼を通して培った関係を生かしてインタビューに協力していただいた。

3 発問の工夫

中心発問は、資料を離れ、「誰もが理想の職業に就いて、理想的な生き方ができる

か」と問いかけた。生徒からは、「そんなの無理に決まっている」等、現実的な答えが返ってきたが、「それならば幸せにはなれないのか」と切り返すことで、どんな仕事に就いてもその中で理想を実現しようという生き方の中に幸せがあるのではないかという考えに結びつけた。

4 生徒の反応（授業後の感想）

生徒からは、次のような感想があった。

- ・ぼくもまだ将来の仕事のことなんか考えていなかった。早くやりたいことをみつけたいといけない。
- ・わたしは自分になりたいものがある。でも、その職業に就けばそれで幸せになれるのかわからなくなった。その後のこだわりや燃える情熱の方が大事な気がした。
- ・今度の職場体験学習は正直めんどくさい気がしていたけど、ぼくにとってもよい体験になればいいと思う。

職場体験学習への期待が高まった感想が多かったが、こういう風にしたいという心掛けについては記述があまり見られなかったことで、道德の時間のねらいが達成できたと評価した。

5 実践者からの一言

道德の時間と職場体験学習を関連付けることを意図して資料を作った。職場体験学習そのものに引っ張られて道德の時間の本来のねらいが達成できない授業をみることも多い中で、体験活動と連携した道德の時間の在り方について考える良い機会となった。